I

革命エデュケーション 第二部

スポーツ身体の語る声

第一回 スポーツにつながれる身体

Sports

Contents

スポーツがはぐくむ共同体意識　3

スポーツで盛り上がる祭　9

不自然に動く身体　14

Sports

スポーツがはぐくむ
共同体意識

鵜川　いよいよ始まりましたね。「革命エデュケーション 第二部」！

細井　お待たせしました！　今回はスポーツを題材として取り上げたいと思います。オリンピックやサッカー日本代表、WBC といった世界的な国際大会の話題、それらに対するメディア言説、またスポーツを題材としたマンガや小説などの表象、スポーツの歴史といったものについて話をしていく中で、それらの中にある政治性や歴史性といった特質について考えてみたいと思っています。

　ところで鵜川さん、最近何かスポーツに関するニュースなどで気になったもの

はありましたか？

鵜川　石原慎太郎の都知事退陣後、後を引き継いだ猪瀬都知事を中心とした招致活動も記憶に新しいですが、2020年のオリンピック開催地の問題は気になるところですね。

　正直、以前は東京にオリンピックが来ても、メリットよりもデメリットの方に目が行っていたのですが、五歳の長男が今回のロンドン・オリンピックの試合の放送を見ているのを眺めていて、東京でやったらやったで何かが生まれるのかもなあと、漠然と思うようにはなりました。

細井　そういうもんですか。

鵜川　まあ正直、東京でやる（というか、日本でやる）こと自体に意味を感じるか、といえば微妙なんですよ。どうせ、テレビでしか見ないわけですから。でも、息

子が「日本がんばれー」とか、「日本ばっかり応援してたらだめだから、今日はドイツ応援するんだ」とか言ってるのを聞くと、国民国家的世界認識への第一歩なんだなー、と実感するわけです。

細井　そうですね、ワールドカップもそうですが、どうしても国家という単位を意識せざるを得ないですよね。高校野球や高校サッカーが、都道府県という単位を意識せざるのを得ないように。

　で、それによって自然と「自己／他者」[1]の共同体を自覚する、という段階へも行くんだと思います。

鵜川　でも、ワールドカップにせよ、高校野球や高校サッカーにせよ、やっぱりスポーツなんですよね。単に共同体を自

1　単に「自分／他人」ということではなく、価値観等を共有する存在を広く「自己」、容易に理解できない異質な存在を「他者」と呼ぶ。

覚するなら、お祭り的なイベントでもよさそうなもんですが、地域に密着したお祭り（地元の夏祭りの類）じゃあ小さな地縁共同体しか見えないし（しかも、そこでつながりが生まれるかっていうと、うちの近所の場合は微妙です）、逆にクリスマスとかお正月、ハロウィンなんかの大きなイベントだと、そもそも共同体意識なんか見えない。もちろん、メディアによって共有された情報による共同体はそこに存在するわけですが、「自覚」とは程遠いですよね。

一方で、共同体への帰属意識を生みだそうと躍起になっている場はいくつかあって、愛国心とか愛校心とか地元活性化とか、それに絡めていろいろな実践は行われてると思うんですが、その中でもスポーツは絶大な力を発揮しているような

気がします。

　先頃、J1 昇格を決めた大分トリニータ[2]は、多額の借金があってチームの運営すら危ぶまれていたのが、地元市民や団体、地元経済界や大分県等の行政からの支援があって、なんとか立て直したっていうじゃないですか。スポーツ以外で、

2　2012 年には、10 月 12 日までに公式試合安定開催基金からの融資の残り 3 億円の返済を完了しなければ、成績上の条件（2 位まで自動昇格、3-6 位は今年度から採用される「J1 昇格プレーオフ」進出権利）を満たしても 2013 年度から J1 昇格をすることができないという条件が課せられた。同年 5 月、3 億円のうちの 1 億円を目標に、市民・団体などから寄付（1 口 5,000 円、上限なし）を募る「J1 昇格支援金」の募集を開始。支援金は、8 月 17 日に目標の 1 億円に到達し、最終的には約 1 億 2,380 万円に達した。この支援金に、地元経済界からの支援約 1 億 920 万円、大分県等の行政からの支出 1 億円を合わせて、支援の総額は約 3 億 3,300 万円となり、大分 FC は 10 月 12 日に基金からの融資を完済した。
（「大分トリニータ - Wikipedia」，http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%A4%A7%E5%88%86%E3%83%88%E3%83%AA%E3%83%8B%E3%83%BC%E3%82%BF#.E8.B2.A1.E6.94.BF.E5.95.8F.E9.A1.8C，参照 2013-04-18）

特定の共同体から継続的に支援や支持を集めるケースっていうのは、あまり思い浮かばないですね。

細井　確かに、スポーツというのは多様な人々を繋げる力を持っていると思います。例えば音楽だったら、あるアーティストやジャンルの支持者というのは、ある程度の年齢層や社会的階層といった偏差が出てくると思うんです。例えば氷川きよしのファンの多くは女性、それも年齢層が高めとか（笑）。だけどスポーツっていうのは、比較的それが薄いですよね。それこそ野球の話題を通じて、飲み屋で見知らぬ隣のおじさんと話すこともできる。そのあたりの力というのはスポーツ特有のものだと思いますね。

　あとは基本的に勝敗がハッキリと分かれるゆえの高揚感というかカタルシスを

生む点でしょうか。一種の非日常的な空間さえ作り出すことができますもんね。

スポーツで盛り上がる祭

鵜川　スポーツの生む強力かつ広範な牽引力は、何から来るんですかね。試合を見に行かないからって排除されるでもなし、下手すれば最低限の情報（勝敗とかチームのメンバーのこととか）を持っているだけでも、その共同体に参加してる気分になれる。

　さっき、「地元活性化」って書きながら考えてたのは、実はB-1グランプリ[3]のことなんですが、参加する団体、支援

3　地域活性化を目的として、2006年から行われている「B級ご当地グルメ」を競うイベント。

する団体、そして参加者も巻き込みながら盛り上がる会場は、そこそこ継続的な影響力を発揮する場を形成しているように見えるんですが、そこに参画するには、そもそも時間と空間を共有する必要がある。単純な話、B-1 グランプリ会場の様子を生でテレビで見てても、その人はあくまで外側ってことです。でも、スポーツはそうじゃない。もちろん、試合を見に行ったりスポーツ・バーで観戦したりすれば、そこで濃密な関係性が生まれることがあるんだろうとは思いますが、テレビの前で見てる人がそういった共同体そのものから排除されることはない。

　何なんですかね、スポーツのこの特殊性は。

細井　まぁ一時期以降、特にラジオや TV といったほぼ同時中継が可能になっ

て以降のテレ・メディアの問題というのも考える必要はありますけれども、もともとスポーツというのは、時間と場所を共有することによって祝祭に参加する、というタイプのものだったと思います。現在でも基本的にはスタジアムなどの現場で観戦することが、一部の熱狂的なファンたちにとっては重要なことですよね。

　その意味では、スポーツというのはやはり、神事とか祭りのような要素というのを本質的に持っていますよね。さっき挙げたような非日常的な空間を作り出して、人々に異常な高揚感を与えるという。だから今一括りにスポーツのこととして話しているけど、非常に近代的というか、近代以降だからでないとあり得ないような様態と、そうではない前近代的な側面

というのを併せ持ってると思うんですよね。そのあたりは非常に興味深いなぁと思います。

　もう一つ言えることは――話がちょっと前後しますけど――一種の共同性というか、共同体意識みたいなものが醸成されるというところ。これは地域であれ国家であれ、共通していると思います。

鵜川　いやあ、実は、僕はスポーツをあまり見ないんですよ。野球もサッカーも、何をポイントに見ればいいのか分からない。個人競技は分かりやすいんですよ。見るからにすごいことをやってるものが多いから（そうじゃない競技は厳しいですが）。

　それこそ、応援するチームができたりすれば、見方なんてのは後からついてくるのかな、とも思うんですけど、今更感

が強くて。でも、そういう人って、それほど少数派ではないと思うんですよ。ところが、国際大会になると、また変わってくる。Ｊリーグには興味がなくても、日本代表は応援してるっていう人は、結構いる。むしろ、応援しないと非国民扱いされそうな雰囲気ですよね（笑）。そういう意味で、国際大会は分かりやすく祝祭空間を現前させるんだろうと思います。

　とはいえ、全ての国際大会が祝祭になるわけじゃないんですよね。もちろん、競技人口とか世界大会での成績とか、いろいろな要素がからんでくることだとは思うんですが（国際大会である必然性もないし）。そもそも、五、六十年さかのぼれば、街頭テレビでプロレス観戦、なんていう時代じゃないですか。そうする

と、スポーツの生み出す場の特殊性を考えるには、身体の特殊な様態と同時性っていうのが鍵になるのかな、なんて気がします。

細井　おっと、鵜川さんからスポーツは見ない宣言が（笑）。

　そうなんですね。僕はスポーツ自体は大してしないんですが、観戦するのは好きです。オリンピックなんかでも、とりあえずやってる競技があったら観ちゃいます。カーリングとかホッケーみたいなマイナー競技でも。

不自然に動く身体

細井　同時性と身体性のことを語るには、やはり今僕たちが考える「スポー

ツ」が輸入されたものである、ってところからまず考えなければいけないと思います。

　要するに江戸時代以前は「スポーツ」という概念は存在しなかった。じゃあどんな形が想定されるのかというと、例えば古武術とか剣術ですよね。これは武士階級であれば必要不可欠な能力です。江戸時代になって大きな戦というのは無くなったけれど、仕官とかのためには技術がいる。宮本武蔵じゃないけれど。となると、身体技法としての武術みたいなあり方だったのかな、という。

　で、注意する必要があるのは、武術の心得というのは主として武士階級の人々が身につけるべきスキルであって、万人にそれが求められているわけではないところ。江戸時代までの社会は身分社会な

ので、「士農工商」という言葉で象徴されるようにそれぞれの階層における差異というのが大きいですよね。例えば言葉遣いも違えば、服装や所作（身ごなし）も違う。もう一目見て「違うな」ってわかるわけです。で、それぞれの階級によって求められるものが異なり、それに応じて教育のシステムや中身も変わってきます。具体的に言えば漁師だったら魚の獲り方や船を操る技術が求められるわけだし、商人だったら算術とか店の経営学みたいなスキルが求められて、それぞれを幼い頃から叩き込まれる。このへんは全部の科目をとりあえず満遍なく、っていう近代以降の教育のあり方とは全く違いますね。

鵜川　ちょうど高校一年で扱う「身体像の近代化」や「『である』ことと『する』

こと」の中でも出てくる話題ですね。身体に対しては、社会階層ごとに異なる拘束が働くという内容です。例えば、農家に生まれた子供は、農民的な身ごなしを、日常的な仕事の中で自然と身につけていく。一方で、武士や上層階級の人たちは、身体に対する不自然な改造を要求される。日常生活とは別の次元で、社会的な身体を形成する必要に駆られるという点だけ見れば、近代以降に身体に施された拘束＝教育と同じだと思います。もちろん、そこで要求される身体の社会的意味は、時代によって全く別のものになるわけですが。

細井　うんうん、身体が教育＝拘束によって社会的に形作られる、という意味では武士の身体は近代の人々に施された身体改造と近いですね（あと、それとは関

係ないですが華道や茶道、歌舞伎などの芸事も思い出してしまいました)。

鵜川　それと、剣術に関して言えば、もしかすると戦が無くなったからこそ、というのがあるのかもしれませんね。実戦から乖離することによって、純粋に技術として洗練することが可能になる、というか。弓術も馬術も、実戦以上に儀礼的な側面が重要だったわけですし。そして、技術が実を求めないからこそ、精神にその価値の在りどころを求めることも可能になる（実際には儒教が仏教から独立して扱われるようになったことも影響しているようですが)。今で言う「柔道は武道かスポーツか」という議論に近い感じですね。スポーツにおいて、ルールが重視されるように、剣術は型が重視される。精神の在り様も、もちろん型によって規

定されていくわけです。そして、型を重視するからこそ、武士以外の階級の人々に開かれることも可能になる。

細井　でも、武道に代表されるそのへんの儀礼的な部分というのは、いわゆる近代スポーツとは対極のところにありますよね。スポーツの方は、たとえ卑怯な手であっても最終的に勝てばいいというような価値観。これは武道には見られない。

鵜川　確かにそうですね。そのスポーツ観については、「ちがうんじゃないの」と思っている人もいるかもしれませんが、スポーツはその本義において勝利至上主義です。

　先日、準決勝で敗退したワールド・ベースボール・クラシック（WBC）を考えると、分かりやすいですね。侍ジャパンが帰国した成田空港の出迎えが百人程

度しかいない、なんていう報道[4]以上に、そもそもWBCの続報がほとんどなくなった。みんな、どこが優勝したのか知ってるんですかね？

　あるいは、昨年十一月に柔道日本代表監督に就任した井上康生氏は、勝ちにこだわるために、世界中の格闘技を研究する[5]なんてことを言ってましたね。どんなにきれいごとを言っても、勝たなきゃ聞いてもらえない。それがスポーツの世界です。

細井　世界中の格闘技を研究するってのはスゴイな（笑）。なんかかつての格闘

4　日刊スポーツ「侍帰国も寂しＶ逸に出迎え100人／WBC」，http://www.nikkansports.com/baseball/wbc/2013/news/p-bb-tp0-20130320-1100130.html，参照2013-04-18

5　Sponichi Annex「康生新監督　再興へ異種格闘トレ『積極的に取り入れるべき』」，http://www.sponichi.co.jp/sports/news/2012/11/29/kiji/K20121129004661050.html，参照2013-04-18

技ブームのときのことを思い出してしまいました。あの頃、「最強の格闘技は何か？」みたいなのがマニアの間では話題になってしましたよね。

鵜川　個人的には『修羅の門』[6]を思い出しますね。主人公の陸奥九十九が、自分の身につけている古武術を「人殺しの技」と言っていたり、「強い方が負ける事はない」と言っていたり、こうやって書き出してみると身も蓋もないセリフですが、勝つことが全てという価値観にはしびれます。

　とはいえ、実際のスポーツにおいては、それはあまりに教育的でない（笑）。だ

6　1987年から1996年にかけて連載された、川原正敏による漫画作品。千年不敗の古武術・陸奥圓明流の継承者である陸奥九十九が、地上最強を証明するために、空手、ボクシング、柔術など、様々な格闘技の強者に挑んでいく様を描いた格闘漫画。現在は、2010年に『修羅の門 第弐門』として、連載が再開されている。

から、身体とは別の領域――精神に、スポーツマンシップといった理念を置く必要があったわけです。心技体という言葉が、歴史的にどこから出てきたのか分かりませんが、少なくとも武道において、これらの要素は不可分のものとして了解されていたはずです。ところが、スポーツの領域においては、バラバラのものであるという前提がある。「心・技・体のバランス」なんていう言い方に端的に表れていますね。そもそも、身体と精神を分離して考えること自体が、西欧近代の産物なわけですが。

細井　その思想を前提として、身体の側を合理主義的、能率主義的に訓練していく、という点で軍隊とスポーツは似ていますね。さっき話に出た野村雅一氏の「身体像の近代化」の中では、近代において

一般市民の身体が学校教育の中で改造／形成されていくあたりの事情が説明されています。明治10年（1887年）の西南戦争のときに、旧幕府軍に対して官軍は歯が立たなかった、それは戦争のために訓練された身体を持つ人々とそうでない人々との違いによるものだった、だからそれ以後明治政府は民衆の身体を軍事教練的な方法で改造しようとした……こんな流れです。で、近代スポーツにおける身体というのも、ある意味では明治政府が作り出そうとした「国民一人一人が兵士たりうる身体」の延長線上にあるもののように思います。

　あとは「何をするための身体か？」という目的が明確なところも似ています。戦争なら戦争、サッカーならサッカー、あるいはテニスならテニス。

で、最終的には一種の機械とかサイボーグ的なものが目標とされる。そこで、さっき鵜川さんが話していたような肉体性というのが前景化してくるんじゃないかと思います。それまでは身体というのは武道とか祭祀、あるいは労働といった中で意味を持たされていたわけですが、そういったコンテクストから離れた形でそれ自身が立ち現われてくるという。

鵜川　身体が、あくまで機能を果たすためのものに過ぎない、ということですね。

（以下次号）

《革命エデュケーション》

スポーツ身体の語る声

【第一回】スポーツにつながれる身体

平成 25 年 4 月 22 日　発行

著　者　細井 正之・鵜川 龍史

編集者　鵜川 龍史・細井 正之

発行所　世田谷学園 国語科